

東京YMCA

5
2022

東京YMCAの使命

東京YMCAは、イエス・キリストによって示された愛と奉仕の精神にもとづいて、青少年の精神、知性、身体的全人的成長を願い、地域社会に奉仕し、公正で平和な世界をつくるための運動を展開する。

平和を願うすべての人と連帯目指す



ウクライナで支援を継続

2月24日の侵攻直後よりウクライナYMCAは、国内25拠点を活用して緊急支援活動を行っています。爆撃地から逃れる人びとに食料や宿泊場所、衛生用品などを提供する他、戦争が長期化する中で、青少年団体としての特徴を生かした活動を展開しています。

ウクライナ西部にあるカルパティヤYMCAは、3月末時点で300人以上の避難民を受け入れ、宿泊や更なる避難を支援。現在YMCAの敷地内は地元の子やボランティアの活動拠点となっており、応急処置のワークショップなども随時開催されています。同じく比較的安全なウクライナ西部にあるズドルブニツヤYMCAも、避難してきた子どもや保護者を対象に絵やクイズを楽しんだり、ヨガをしてリフレッシュする機会などを提供しています。東ウクライナに位置するサポリージャYMCAは、平和への祈りを込めた子どもたちの絵による展覧会を開催。他にも、飼い主を失ったペットを新たな飼

い主へつなぐ特別な支援グループを立ち上げるなど、YMCAならではの取り組みを行っています。

日本への避難もサポート

一方、日本では、日本YMCA同盟がウクライナ近隣諸国のYMCAおよびヨーロッパYMCA同盟と連携を図り、日本に避難を希望するウクライナ人の「日本避難緊急人道支援活動」を展開しています。この活動により4月25日までに30組80人が成田に到着。引き続き

きYMCAのネットワークを活かして避難民のビザ申請や移動、滞在のサポートを行う計画です。4月12日、上記の活動状況を詳しく分かち合うオンライン報告会が日本YMCA同盟主催で開催され、日本全国のYMCAやワイズメンズクラブ、関連団体より約200人が参加。今後の支援の可能性を模索しました。平和を求め、すべての人と連帯しながら、東京YMCAも引き続きできる支援を実施してまいります。（2・3面に関連記事）

新企画「ニュースポーツ」で世代間交流

4月14日、東陽町コミュニティセンターにて月例の新企画「ニュースポーツ」が始動。初回は、高齢者を中心に11人の参加者と4人の学生が、主にヨーロッパで普及するスポーツ「ペタンク」に取り組みました。ニュースポーツとは、勝敗にこだわらずレクリエーションのように気軽にできるスポーツを指します。コロナ禍で「歌の広場」などの活動の休止が続き、「外で人と話す機会がなくなった」、「足腰が弱った」などの声に応じて始まった本企画には、社会体育・保育専門学校の学生もボランティアとして関わります。

新企画「ニュースポーツ」にボランティアとして携わるのは、社会体育・保育専門学校の「コミュニティ活動ゼミ」に所属する2年生です。このゼミは、本校学生にも地域の方と交流する機会を多く持ってもらいたいという願いを込めて昨年9月に立ち上げました。高齢者を中心とする地域の活動にゼミとして関わるのは今回が初めてでしたが、皆さんが気さくに声を掛けてくださったことで学生の緊張も解け、ゲームの最中は互いにアドバイスをしたり好プレイをたたえたりと、普段教室ではなかなか見られない新たな一面を見ることができました。学生からは、「みんなでボールを投げるコツを話し合い、和気あいあい行うことができた」、「気付いたら夢中になってプレイしていて、皆さんとも良い勝負ができた」、「高齢者の方と思ったより自然に会話ができた自分に驚いた」などの声が聞かれました。

単位や資格を取って卒業するだけでなく、本校学生にはYMCAのさまざまなフィールドやノウハウを活用して、今後も人として成長して欲しいと願っています。

社会体育・保育専門学校 松原 愛作



江東センター・幼稚園に飾られたウクライナ国旗のモニュメント。児童と募金賛同者の手形によるもの

赤△三角

私たちの地球は感染症と戦争という二つの危険に直面し、その泥沼から抜け出すことができないでいる▼聖書には、「喜びと共に喜び、泣く人と共に泣きなさい」（ローマ12・15 新共同訳）とある。「最も小さい者の一人にしたのは、わたしにしてくれたことなのである」ともあり、「飢えていたときに食べさせ、のどが渇いていたときに飲ませ、旅をしていたときに宿を貸し、裸のときに着せ、病気のときに見舞い、牢にいたときに訪ねてくれた」（マタイ25・35-40）と、私たちが今、なすべきことを具体的に指し示す言葉を見出すことができる▼どんなときも最も弱い立場に置かれた友のために心と力を尽くすこと、それはすなわち、コロナ禍で困窮している人びとや、今の瞬間もウクライナの戦禍で苦しみを悶えている人に手を差し伸べていくことに他ならない▼大きな変革が必要なとき、国連の持続可能な開発目標（SDGs）も掲げているように「誰も置き去りにしない」という天地創造以来のミッションを継承し、「最も小さい者」をこそ中心に据えて寄り添うコミュニケーションの種を蒔き続けたい。

学院 学院長 堀口廣司

ウクライナYMCAと共に —東京YMCAとの交流20年—

チェルノブイリ原発事故から15年が経過した2002年、
ウクライナYMCAから東京YMCAに次のような強い希望が寄せられました——

「原因は違うけれど同じ被爆国として交流できないか」。

以来今日に至るまで、両YMCAは子どもや若者が中心となって草の根の交流を続けています。
平和への願いを込めて、ウクライナYMCAと共に歩んだ20年の軌跡をご紹介します。
(文・広報室)



2002年

「同じ被爆国として交流したい」
ウクライナYMCAからの交流の申し出に最初に応じたのが、東京YMCA第3代神田会館（国際奉仕センター）の活動グループ「中庭プロジェクト」。現地の「折り紙教室」のカウンターパートとして、折り紙をはじめ双方の文化を紹介するものを送り合う交流がはじまる。

2004年

国際交流絵画展の開催

ウクライナYMCAで行われた「絵画・文芸コンテスト」の優秀作品が東陽町センターで開催された「クリスマスオープンハウス」で展示され、東京YMCAより参加証を贈る。



2006年

ピース・スタディーツアーの実施

1986年のチェルノブイリ原発事故から20年の節目に、同じ被爆国である日本のYMCAと共に平和やいのちを見つめ直す機会を持ちたいとスタディーツアーを企画。東京YMCAが募集した参加者2人（学生、スタッフ1人が、首都キエフの戦争歴史博物館やチェルノブイリ博物館を訪れた他、日本の文化紹介やホームステイなども経験した。同行してくれた現地スタッフより原発事故当時の詳しい状況や、被爆者として何年か検査を受け続けなければならない実情が語られる場面も。参加者からは、ウクライナで出会った人びとの対話を通じて日本のことについても考え、見つめ直す機会を得た、「一問が作り出したもので、人間自らが大きな代償を払うべきにもない」と、若者らしい素直な感想が聞かれた。



2007年

両YMCAで絵本を贈り合う

NPO法人「おにぎり文庫の種」の協力のもと、互いの国の絵本を贈り合う交流が実現。ウクライナからは「三匹のこぶた」など日本人にもなじみの深い4種類20冊の絵本が届けられ、東雲ファミリーセンターや児童英語クラスの子どもたちがストーリーや挿絵などを比べて楽しんだ。

2008年

クリスマスカード交換がはじまる

前年の絵本交換がきっかけとなり、子どもたち同士のクリスマスカード交換がはじまる。以後、クリスマスの日に合わせて子どもたち自ら手作りのカードやプレゼントを準備して贈り合う交流が毎年欠かさず続けられている。当初の参加メンバーは、東陽町語学教育センターと山手コミュニティセンターの活動グループ「きらきら」の約60人。現在は、児童英語クラスや英語幼児園「キッズガーデン」の子どもたちも交流の輪に加わり、毎年約160枚のカードとプレゼントを交換し合っている。「まだ会ったことのない友の顔を想像したり、海を越えて届くカードをワクワクして待ち望んだりしながら、子どもたちは自然に相手の国への興味や親しみを感じている」と、担当スタッフ。



2014～2015年

インターネットによる
通年交流プログラムを実施

東京YMCAインターナショナルスクール「TYIS」の生徒たちが、ウクライナYMCA近隣の高校生とインターネットを通じてメッセージや動画の交換を通年のプログラムとして実施。ウクライナから国民的詩人タラス・シェフチェンコの詩の朗読動画が届くと、日本の生徒たちは同じ詩をウクライナ語と英語で朗読するために何時間も特訓。その様子を動画に収めて送信すると、ウクライナの高校生たちも金子みすゞの詩を日本語と英語で練習し、手振り日本をつけた動画を返してくれた。このような交流の最中に、ウクライナ国内で緊張が高まり、ウクライナYMCA関係者も含め多数の死傷者が出る事態に、「デモが鎮圧され、100人以上の人が亡くなっている」、「国が分断されるのはいやだ」など、現地のから悲しみの声を受け、「ぶつ、古くからの友達みんなに励ます」ことを望んだTYISの生徒たちは、「話し合いによってこの問題が早く解決されるように願っている」、「ウクライナにはより良い未来を作っていく大きなエネルギーがあると信じている」とメッセージを送り続けた。



2016年

ウクライナの児童養護施設へ
手編み帽子プレゼント

TYISの小学5～6年生17人が、手編みのニット帽を制作してウクライナYMCAが支援する孤児院の子どもたちに贈る。これは、TYISの社会科の授業で行われているサビスニングの一環として企画、実施されたもの。生徒たち全員が編み物未経験の中、長期間にわたって根気の必要な作業と向き合った。完成したニット帽計63個は、遠足で行った浅草寺のお守りや扇子のおみやげなどと共に現地に届けられた。



2022年

ウクライナへお見舞いメッセージを送付

2月末、東京YMCA英語幼児園「キッズガーデン」の園児たちが、ウクライナの人びとを思いながら励ましを込めたメッセージを送った。※実際のメッセージは見出し横を参照

20年来の友のために、今後でもできることを

東京YMCAには、ウクライナYMCAとの長年の交流に基づく顔の見える関係があります。このつながりを存分に活かして、今後も現地の人びとの生の声に耳を傾け、心に寄り添った支援を、ウクライナYMCAと共に進めてまいります。一方で、緊急時の求めに応じた迅速で的確な働きと併せて、これまでのように、平和の基盤となる精神をゆっくり豊かに育むような地道な活動も粘り強く続けていきたいと考えています。

東京YMCA国際・総合教育事業部 松本 数美 統括

WHOウォーク、桜の見頃に再開

3月26日、一年以上の休止を経て「ウォーキング・ホリデー・萩窪（WHO）」の活動を再開し、参加者32人が杉並区の善福寺川緑地周辺を歩いてお花見を楽しみました。当日は天候にも恵まれ、新しく完成した高層住宅街の沿道を花の名を口々に言って歩くうちに善福寺川緑地に到着。その瞬間に広がった桜景色に、皆が次々と歓声をあげました。再開後の初回とあってどこことなく漂っていた緊張感も一気に和らぎ、その後も善福寺川の河畔をゆっくり歩きました。昼食は、釣り堀近くの小公園にて。「休憩たっぷり、歩行ゆっくり」、桜の見頃と一致した久しぶりの活動を全員が満喫し、最後は高台に上って源頼義、義家ゆかりの大宮八幡宮で解散しました。



(東京西ワイズメンズクラブ 吉田 明弘)

第31回チャリティーゴルフ大会を開催

4月14日、千葉県成田市にあるPGM総成ゴルフクラブを会場に「第31回チャリティーゴルフ大会」が開催され、89人の参加がありました。

当日は小雨交じりの曇天で気温も低くあいにくの天候でしたが、参加者の皆さまには終日ゴルフプレイを楽しんでいただきました。コロナ感染対策もあり、終了後の表彰式やパーティーなどは実施できませんでしたが、プレイ後に「くじ引き抽選会」を行い、参加賞と合わせて多くの協賛品を参加者にお渡ししました。

今回の支援金約40万円は、経済的に困難なご家庭の子どもたち、障がいのある子どもたち、不登校の子どもたちの支援、災害復興支援として用います。皆さまのご支援に心から感謝申し上げます。



(会員部 熊沢 佳代)

歌の広場「特別プログラム」を開催

コロナ禍にあって長らく休止を余儀なくされていた「Yわい歌の広場」でしたが、参加者、職員、ボランティアのあついで要望により、4月21日、万全の感染症対策のもと特別プログラムの形で東陽町コミュニティセンターを会場に2年2カ月ぶりに開催いたしました。ゲストは、「陽春のつどい」でもお馴染みのハッピーブラザーズの福田兄弟。ギター、サキソフォンの演奏で、「ブルーシャトウ」「学生時代」「あずさ2号」「はまべのうた」「高校三年生」など、マスクを着用のまま約20曲熱唱してくださいました。参加者も、手拍子足拍子、マスクの下で口ずさみながら一緒に楽しみました。参加者からのリクエストがあり、ウクライナ民謡「キエフの鳥の歌」の美しいピアノ伴奏に聞き入りながら、戦争で大変な被害を受け苦しめられている方々の無事と戦争終結のために祈りを合わせる場面もありました。最後は、「ふるさと」「いつくしみ深き」を小さな声で合唱し、全員で再会を誓いました。



(Yわい歌の広場 委員長 吉田 紘子)



総主事カフェ

東京YMCA総主事

菅谷 淳

総主事カフェにようこそ。連日ウクライナの悲劇が報道されています。町が破壊され何の罪もない民間人が被害に遭う姿に胸を痛めています。一方で、マスメディアの多くがウクライナが正義であり、軍事侵襲したロシアが悪であるという前提に立っているためでしょうか。知らず知らずのうちに自分も心の中でロシアと戦争をして、その軍艦が沈没したと聞けば安堵し、為政者への憎しみを募らせていることに気づき、はっ

と我に返ります。憎むべきは人ではなく暴力そのものであること、そしてYMCAに連なる者として、敵味方の区別なく人道支援に徹することの大原則に立ち返ります。相手を打ち負かすことがお互いの正義になってしまう戦争の無意味で恐ろしいところです。さて、3月にウクライナ軍に降伏したロシアの兵士がウクライナの住民によって優しく労われる映像が公開されました。そこには、若いロシア軍兵士が武器を捨てた後、住

民からパンと紅茶を分け与えてもらう様子が映し出されています。また別の兵士はロシアにいる家族とテレビ電話をつないでもらい、画面に母親が現れると涙を流し、これを隣で見ていた住民も涙を拭きました。「この若者たちは、なぜここに来たのかも知らない。古い地図を持って道に迷ったウクライナの兵士がウクライナの住民によって優しく労われる映像が公開されました。そこには、若いロシア軍兵士が武器を捨てた後、住

東京ーNY フロストバレー便り

*ニューヨーク近郊の日系人を対象にキャンプ等を行なっている「東京-フロストバレーYMCAパートナーシップ」。現地向向中のスタッフのお便りを紹介します。

4月18日、フロリダ州の連邦地裁が米国疫病予防管理センター（CDC）による公共交通機関でのマスク着用の義務付けについて「違法で無効」との判決を出しました。これを機に、現在アメリカでは、各地の公共交通機関でマスク着用義務の解除が進んでいます。この流れを喜ぶ声も多く聞かれますが、各州で独自の法律を制定する国において、例えば州をまたいで出勤する場合など混乱が生じることが予想されます。ワクチン接種についても、先日50歳以上を対象に4回目（2回目の追加接種）が始まったところで、オミクロン株の蔓延に伴い、子どもたちへのワクチン接種も推奨されており、予断を許さない状況が続いています。

そのような中であって、フロストバレーYMCAは、平常通りのプログラム運営ができるよう尽力しています。今年のサマーキャンプについては、参加者スタッフ全員にワクチン接種を必須とし、すべての参加者およびその家族の健康と安全を保障した上で実施することが決まりました。日常のプログラムもほぼ従来の形で実施できるようになり、週末は家族、平日は学校団体のためにオープンしています。久しぶりの利用再開となった学校団体の中には、私たちが長年関わるニューヨーク州やニュージャージー州の日本人学校も含まれています。日本人学校の在籍者は駐在家族の割合が多く、先生方も約3年で入れ替わりとなります。人の出入りと変化が激しい環境の中で、東京-フロストバレーパートナーシップの恒常的なサポートがあることを心強く思ってくださいる方も多く、地域で生活する日系コミュニティを支えるという、まさに私たちのミッションに根差した活動には力が入ります。例年の規模での実施となる今夏のキャンプの準備も佳境に入ってまいりました。安心安全、かつ子どもたちが生き生きと活動し、仲間との絆を深め、様々なことに挑戦する有意義な夏を過ごしてほしいと心から願っています。

(東京-フロストバレーYMCAパートナーシップ 嶋山 徹郎)

東京-フロストバレー
YMCAパートナーシップのサイトはこちら➡

